

日本における心身障害者体育に関する史的研究（第7報）——石井亮一の精神薄弱児体育論——

北 野 与 一

A Historical Study of Physical Education
for the Handicapped in Japan (VII)
— Ryoichi Ishii's View of Physical Education
for the Mentally Retarded —

Yoichi KITANO

は じ め に

わが国における精神薄弱児教育は、学校教育の領域と社会福祉施設の領域の中で芽ばえて発展した。その主導的役割を果たした代表的機関が、教育面では東京高等師範学校附属小学校補助学級であり、社会福祉面では滝乃川学園であると言われている。⁽¹⁾ 滝乃川学園は、石井亮一（1867～1937）創設によるわが国最初の精神薄弱児福祉施設である。石井は欧米の近代的な精神薄弱児教育をわが国に紹介、特に E. O. Seguin（1812～'80）の生理学的教育法を導入し、「教育と医療と宗教」を通じて精神薄弱児を育成、なお「施設職員の養成」など障害児教育史に偉大な足跡を残した人として知られている。⁽²⁾ 脇田良吉は滝乃川学園をして「我国低能児教育の根拠地」⁽³⁾ であると指摘しているように、同学園、換言すれば、石井のこの教育実践はわが国における精神薄弱児教育の出発点であると言ってもよい。従って、当然なことであるが、滝乃川学園並びに石井に関する教育学論稿も数多く報告されている。しかしながら、そうした報告には、石井の精神薄弱児教育を体育的立場から本格的に検討を加えたものは見当たらない。体育が石井の精神薄弱児教育の中で大きな比重を占めていたことは、彼の代表的著作である「教育学講義」に見られる体育論⁽⁴⁾、「白痴児其研究及教育」における運動論及び「治療教育技術」における「遊戯競技」論⁽⁵⁾からも明らかである。その意味で石井の精神薄弱児教育論を概観する場合には、彼が体育をどのようにとらえ、どのような体育的内容や方法で実践したかも検討の対象に加えなければ、彼の精神薄弱児教育に関する全体像が明らかにされたとは言えないだろう。加えて、彼のその体育論形成の背景や影響などについて検討することも、精神薄弱児教育史上有意義なことと考えられる。

なお、本稿は、拙稿「日本における心身障害者体育に関する史的研究」における第6報まで

の盲学校体育及び聾学校体育を中心とした史的研究に続くものであることを附記しておきたい。

I 目 的

石井亮一の精神薄弱児教育における体育論の内容とその展開（指導の実際）、並びにその形成の背景や影響に関して若干の検討を加える。

II 方 法

石井の主要な著作が収録されている「石井亮一全集」を中心に、彼の発表論文及び滝乃川学園や石井に関連する諸報告を史・資料として検討を進める。

III 結 果 と 考 察

1. 体 育 論

明治27(1894)年頃に使用された立教高等女学校及び滝乃川学園保母養成のための講義録とされている「教育学講義」の中に、石井の教育論の一端が論述されている。同27(1894)年頃
 と言えば、彼がアメリカに留学する以前のことであり、「ドイツの教育思想・学説が直接輸入
 され、これが主流を占め」⁽⁸⁾ていた時期であった。同20年代の初め、ドイツ人ハウスクネヒト
 (Hausknecht, E. 1853 ~ 1927) によってヘルバルト派の教育学がわが国に伝えられ、約10
 年間にわたり全盛を極めた。このヘルバルト派の学説は、ケルン (Kern, H.), リンドネル
 (Lindner, G.), ライン (Rein, W.) らの教育書によって紹介された。この「リンドネル、ラ
 イン、ケルンは、ヘルバルト学派中、最も名高い学者」⁽⁹⁾であり、当時、特に湯原元一訳の「倫
 氏教育学」(明26.<1893>) が広く読まれたと言われる。石井は自身の教育概念を規定する
 に当たって、その原点をリンドネルのそれに求めていたように思われる。即ち、彼はリンドネ
 ルの「教育の要約となるべき四箇の条件」を肯定し、「教育とは、一定の発達を遂げたるもの
 が、一定の目的と方法により、未だ発達せざるものに与ふところの有意的感化」⁽¹²⁾であるとする
 理念を重視した。また、続けて「教育は、彼の塑像、若くは木像を任意に製出する土師又は
 彫刻師に比すべきものにあらざして、彼の適宜の保護と刺衝とを与へて植物の先天的能力を啓
 発し、因りて其生長繁栄を画るところの園芸師に比すべきもの」ととらえたリンドネルの考え
 方に対しても、「蓋し、教育の力の及ぶべき範囲を限定して要を得たりと云ふべし」と、賛同
 の姿勢をどっている。その結果、石井は人間の発達性と教育の限界を認め、教育を「一方に於
 て被教育者を導きて人格の完成に必要な個人的資質、即ち(一)身体各部を平等不備に発達せ
 しめて強健なる調和を保たしめ、(二)強健なる心力を有し、必要な知識と円満なる道徳を有せ
 しめ、又他の一方に於ては、其社会的資質たる、国家、社会、家族の一員として必須なる道徳
 と知識を具備せしむるにあり」⁽¹³⁾ととらえた。これを受けて、彼は教育を「身体教育」と「精
 神教育」とに二分した。身体教育、即ち体育は養護、精神教育は訓練及び教授による
 方法があると考えたのである。以上のように、石井の教育論は人格の完成を中核として、心身
 並びに個人と社会の調和的発達を強調する立場をとっており、リンドネルの教育概念の重視、

徳性涵養の強調、三部門に分けた方法論などから、その基調はヘルバルト派の教育学を背景にしたものであったと言えよう。なお、「教育学講義」⁽¹⁵⁾では、ローゼン克蘭ツ、ラスキン、コメニヤス、フラッチヒ、ハレック、ボイド、フィヤオールト、ヴェン、ガルトン、チャニング、デューウェー、フェーフェランド、ランドア、リュウゲル、スタイナー、コム、キングスレー・チャールス、ホッヂ、ジョンノット、プライエル、ヒューベル、グッゲンブール（以上の表記は石井による）などの幅広い分野の意見を引用しており、そうした欧米の先進的な理論も彼の教育論を形づくるのに少なからず影響していたように思われる。

教育の作用を大別して身体⁽¹⁶⁾の教育と精神の教育とした石井は、体育の目的を「身体⁽¹⁶⁾の完全円満なる発達」に求め、それは「児童身体⁽¹⁶⁾の養護のために施すところのものにして、適当なる食物⁽¹⁶⁾空気を与へ、皮膚の清潔、身体⁽¹⁶⁾の運動を奨励し、疾病を未発に防ぐ等の作用」と理解した。従って、その内容は上述からもうかがえるように、栄養、呼吸、皮膚、運動、休息などの全身の衛生に必須なる条件や脳髓及び神経系統の保護にいたる広範囲なものであり、その方法も多様で、「発達を助くべき一切の方法」⁽¹⁷⁾を含んでいた。ここでは、特に彼の運動論⁽¹⁸⁾にふれておく必要がある。彼は運動を四領域、即ち、「(一)規則運動 規定ある遊戯、体操等(二)自由運動 遊戯、散歩等(三)技術運動 テニス、水泳等(四)手工運動 裁縫、割烹等」に分類し、運動は「心臓肺臓の働きを活発にして血行を励し呼吸を催進し、多量の瓦斯交換を営む。而して其結果、身体組織の老廃成分を燃焼変化するの度を増す……精神の過労より生ずる神経系統の疲労を治し、精神を爽快ならしめ、人の風采を高む」ものであるとした。こうした運動領域論は、毛利（19）・神保（20）次郎の「体育学」（明22.<1889>）や高島平三郎の「体育原理」（明41.<1908>）の中でも取り上げられており、石井自身の思索から生まれたものではなかった。また、体育に対する精神陶冶への期待は、前述の毛利・神保の「体育学」⁽²¹⁾にも散見され、その後、明治24（1891）年の「小学校教則大綱」や同27（1894）年の「体育及衛生ニ関スル訓令」の中でも具現されていた。それは、明治20年代に入って漸く台頭してきた欧米的な新しい理念であった。ところで、石井は前述のように教育を二大別したが、それは決して心身二元論を主張した結果でなかった。彼は身体と精神の関係について、次のように論じている。「身体と精神とは密接なる関係を有し、精神は身体によるにあらざれば決して外界に紹介し得られざるもの」であり、「身体⁽²²⁾の爽快と活発とは精神の活動を容易ならしめ、観察思考の力を助長し、善に進むの快感を發せしめ、自信勇気を給与し、且これなくば至良の意志も何事をもなすこと能はざる実行力を養成す。これに反して、身体に病患あれば知性を鈍くし、情感を鬱屈せしめ意志の力を弱くす」と、心身相関論的立場をとっていた。従って、教育を二大別しながらもその不分離性を強調⁽²³⁾、「身体⁽²³⁾の教育と精神の教育とは、両々相待ちて始めて人格の完成を期する」と思惟したのである。こうした観点から、彼の体育論は単なる養護の領域にとどまらず、人格陶冶にまで深く踏み込んでいたものと言えるだろう。

同じ頃、ヘルバルト派の一人能勢栄（1852～'95）が「新教育学」⁽²⁴⁾（明27.<1894>）で、石井と共通点の多い体育論を論じていることに注目したい。能勢は教育を「体育」と「心育」に大別し、「体育は管理、知育は教育、徳育は訓練に属する」とし、「管理は主として児童の身体⁽²⁴⁾の発達を増し、感官を鋭敏にし、衣服、飲食、運動、休息などを適当ならしめ、且秩序静座、礼儀の習慣を養成し、外部の言行を規正するもの」であると、更に、「体育は正面よりも反面よりも共に教育の基礎となすべき物なり。殊に身心相関の理は既に疑ふべからざる一理法」と

指摘している。この能勢の養護的体育論や心身相関論が石井に及ぼした影響は定かでないが、先に石井の教育論の基盤にヘルバルト派の影響が見られたと指摘したように、体育論でも同じことが言えるようである。石井はこのヘルバルト派の教育・体育論を重要な資料として自身の体育論を展開させていったと思われるが、わが国の体育が精神陶冶から更に人格陶冶にまで目を向けるにいたるのは、明治期の終わり頃であった。「体育を、身体にまでの訓養から人格にまでの教養に発展させた」⁽²⁵⁾と評価されている高島の「体育原理」が公にされたのは、明治40⁽²⁶⁾（1907）年前後のことであった。その高島も述べていることであるが、わが国の体育界では、従来運動を単に「筋肉ノ発達」のみを目指すものととらえる思潮が一般的であった。そうした思潮のもとで、明治20年代に早くも人格陶冶を志向した体育論を展開させたことは注目に値する。

石井は、障害児体育の分野においても、これまでに述べてきた一般的体育論を基礎にその理念を発展させている。「教育学講義」では、特に「精神薄弱なる児童の体育」⁽²⁷⁾なる項を設け、精神薄弱児体育に関する諸問題を言及している。先ず「白痴、痴愚、遅鈍の状態にある児童の身体は、精神と共に甚不完全を極め、形体多くは整はざるを常とす」と、その実態にふれ、次のような目的を掲げている。「普通児童に於るより一層体育に注意し、以て及ぶべき限り身体の強健と其活動とをはかり、且これを統一整理して精神の活動と調和一致するに至らしめざるべからず」と、心身の調和的発達をはかることが精神薄弱児体育の目的であるとした。なお、白痴教育では「身体の教育と精神の教育」を「区別して論ずる能はざる」と指摘、主要な指導内容として、住室、食物、衣服、清潔及び運動に関する諸事項が取り上げられていた。例えば、住室では土質、空気、日光、室温、食物では質と量、食事時間、遺尿問題について、いずれも衛生及び生活習慣の養成という指導上の基本方針が貫かれていた。勿論、運動も例外でなく、戸外運動を奨励し快活に運動させなければならないとしていたが、その目的や方法は「普通児童」におけるそれと「稍其趣を異にす」るものであった。即ち、「白痴教育に於る運動の主要なる目的は、児童の痙攣的、自働的運動の矯正に加へて、身体の構造を強健にし且筋肉の統御を自由ならしむる」ことであった。この「筋肉の統御をはかる」という運動指導上の理念は、後述するように、白痴教育に限らず精神薄弱児の運動指導上最も重要視されたものであり、換言すれば、彼の精神薄弱児運動論の中核をなすものであった。それは、「自己の観念を実行し、自己の目的を遂行せしむる」⁽²⁸⁾ことができるようにすることであった。後年、彼は前述の E. O. Seguin の精神薄弱児教育における生理学的教育法⁽²⁹⁾に接して確信を深めるとともに、さらにこの理念の実践化に努力していった。明治末年から大正時代にかけて、乙竹岩造を初め多くの研究者もこの理念を強調、他方、脇田良吉⁽³⁰⁾や川田貞治郎⁽³¹⁾らの精神薄弱児施設創設者並びに荒木善次⁽³²⁾らの「特別学級」担当者によってこの理念が継承されていった。それは、今日も精神薄弱児体育の分野で「脳育」⁽³³⁾と呼ばれ、なお生き続けている理念であり、その原点を彼に求めることができるわけである。

ところで、わが国の小学校教育において、劣等児あるいは低能児と呼ばれた児童に対する遊戯及び体操への関心が高まるようになるのは、明治の終わりに大正初め頃にかけて^{(36), (37), (38)}であった。このように学校教育においても未だ関心を示さなかった明治中期に、欧米先進国の文献や実践にふれ、自身の実践という検証を通して、養護的体育論、即ち、衛生・矯正・筋肉の統御を基調とした体育論を展開させたことは、わが国の精神薄弱児体育史上高く評価される。

2. 体育指導の実際

石井は明治24 (1891) 年に滝乃川学園を創設、以後約45年間、精神薄弱児問題に精根を尽くしたのである。彼は精神薄弱児一人ひとりの「生涯の処置」⁽³⁹⁾について意を注ぎ、学園では彼らとともに教育・医療・宗教の三位一体の生活を実践、この事業を通じ、こうした障害児の教育と保護に関して、社会に対し「警告と啓蒙」⁽⁴⁰⁾を与え続けた。その約半世紀にわたる彼の教育状況の全般を理解するために、本論に入る前に実践された年代別の主要な日課を提示しておきたい。

〈明治44 (1911) 年の状況〉⁽⁴¹⁾ 男子部は石井園長、女子部は同夫人監督し各一室に集り其間に女教師立交りて授業す、各予備科と小学部に別ち個人教育をなす。予備科は課業を二十分間宛とし午前中に終り放課時には音楽を奏して疲労を慰む、主として種々の器械を用ひ五感の練習をなす、其他言語を教へ、身体部位、物品、形体、色彩等の名を教へ、動作を命じて行はしむ、小学部は学課を四十分間宛とし午前中読書、習字、算術を課し午後体操、唱歌、図画を課す。其他男児には園芸を授け又鶏を飼養せしめ女児には造花、裁縫、押絵等を学ばしむ。勿論個人教育なるが故に一人にて或学課のみ小学部に入り他は予備科にあるものあり、大約半数は白痴にして他は痴愚に属す。遊戯はテニス、クロッケー、ブランコ、シーソー、鬼ゴッコ其他随意なり。又時を定めて文学会、運動会、市中散歩等の催あり。

〈大正9 (1920) 年の状況〉⁽⁴²⁾ 日課 午前六時起床洗面 同七時朝食 自八時半至十一時半授業 但第一時限より第三時限まで各卅五分づゝ第四時限を廿五分間とす 正午昼食 自午後一時至二時唱歌遊戯裁縫 午後三時おやつ 午後五時夕食 午後九時年長者就寝……運動の事……男児は午後二時若くは二時半 (体操唱歌等の稽古の都合による) 女児は毎日午後裁縫其他の手芸あれば二時半若くは三時以後随意に庭園内にて運動せしむ、放任し難き児童は当番附添ひつつ遊戯室に集へて遊ばしめ晴天の日には或は手を引き或は見張りをなして庭まはりを散歩せしむ。夕飯後一時間ばかりは晴雨に拘らず全児童を遊戯室に集めおるがんの奏するにつれて唱歌を歌はしめ或は行進せしめ又は自由に運動せしむ。

〈昭和10 (1935) 年の状況〉⁽⁴³⁾ 午前中は学習で四時限 (三五分・三〇分・二五分・二五分この間一五分ずつ休憩)。学級は性・年齢・知能によって五学級とし、一学級の児童数は六～八人、教職員数は一～二人。課目は男児上級で読み方・算術・習字 (一週各四時限)、修身・作文・図画・体操・唱歌・競技 (各一時限)、手工・感覚器官の練習・話し方 (各二時限)。午後は作業で、男子は鶏の世話、温室の栽培、土の出入・耕作、女児は、裁縫、身体虚弱者は校舎の掃除、また幼児は遊戯であった。また日常生活の習練は、終日、時にふれ事にのぞんで試みられた。

以上のように、学園に実践された教育は、教科内容や学習時間の配分など時代の推移によって変容を見せているものの、簡単な学習、手工労働的作業、⁽⁴⁴⁾日常生活の習練及び運動 (体操・遊戯・競技・散歩) を柱に組み立てられていた。⁽⁴⁵⁾以下運動面に焦点を絞り、その教材及び指導法について検討を加えていく。

1) 運動教材

滝乃川学園の保母養成のために、明治40 (1907) 年頃執筆されたとされている「治療教育技術」で、精神薄弱児を対象とした「遊戯競技」⁽⁴⁶⁾が論じられている。それによると、69の運動教材が三部に分類され、各教材の目的と方法が詳述されている。その個々の教材がどの程度使用されたかは定かでないが、各部の教材内容を分析することにより、教材の特質や運動に対する考え方などが明らかにされるものと思われる。

三部からなる69の教材を実施場所、技術性、動作の複雑性、知的活動性、競争性、運動種別という観点から分析・検討したとき、「第1表」のような結果が得られた。⁽⁴⁷⁾

第1表 「遊戯競技」教材の内容

	N	場 所	技 術 性	複 雑 性	知的活動性	競 争 性	種 別
一 部	20	屋内>屋外	低 い	単 一 動 作 基 本 動 作	約 60 %	約 20 %	規定動作 35% 規定遊戯 65% 手工運動 なし
二 部	28	屋内=屋外	中 等 度	複 数 動 作 基本・応用動作	約 64 %	約 30 %	規定動作 57% 規定遊戯 43% 手工運動 なし
三 部	21	屋内<屋外	高い(普通)	複 数 動 作 応 用 動 作	約 90 %	約 50 %	規定動作 5% 規定遊戯 76% 手工運動 19%
(註) 一部～二部で共通している点は、個人的運動と集団的運動の比が約1：4であること、手や脚を使用しての運動が多く、全身運動が少ないことである。なお、％は各部のNに対する百分率である。							

「第1表」のように、各部にそれぞれ特徴が見られることから、児童の諸能力に応じて、教材を三段階に配当し指導していたことがわかる。各部の特徴を示すと、次のようである。

一部：活動能力の最低の児童を対象にした教材であり、主として屋内で行ない、技術的に低く単調な基本動作からなる教材群。

二部：一部の対象児よりやや高い活動能力をもつ児童を対象にした教材であり、単一動作を2つ組み合わせた動作からなる教材群。

三部：健常児低学年程度の児童を対象にした教材であり、単一動作が3つ以上組み合わせられた応用動作を含む教材群。

また、以上の部別の相違点とは別に、各教材に共通点も見られた。それらは、次のような諸点である。

- (1) 個人的教材よりも集団的教材が多い。
- (2) 手、脚を使用しての教材が多く、全身的で持久力を養成するような教材が少ない。
- (3) 運動目的に⁽⁴⁸⁾適応して、何らかの「約束ごと」をもったところの規定された動作や遊戯教材が全てである。
- (4) 注意力、筋肉の統御、眼と手の協同という、強いて言えば、石井が強調している筋肉の統御を目的とした教材が多い。以下に示した「第2表」は、石井が指摘した「目的」を集計したものである。

なお、「遊戯競技」教材には、次のような教具が使用されていた。即ち、ボール（21.7％、以下数字は％）と豆袋・木片（以上20.3）と多く、袋、輪、椅子、標的、紙、箱、綱、縄、籠、鈴、杓子、大きな玉、網、厚紙、箸、はさみ、小石、茶碗、匙、ブラシ、櫛、ガラス、鉄片、小枝、棒切れ、その他、教室にある備品、施設なども教具として活用された。このように、あらゆる身近な材料が、教材の目的に応じて教具として活用されていた。なお、着色可能な教材には、三原色が使われ、注意喚起の配慮がなされていた。こうした身近なものを教材に活用

第2表 「遊戯競技」教材の目的

目 的 \ 部	一	二	三	計	%
注 意 力	6	14	10	30	43.5
筋 肉 の 統 御	5	6	5	16	23.2
眼 と 手 の 協 同	5	1	4	10	14.5
遊 戯 の 興 味	0	3	3	6	8.7
正 確 な ね ら い	1	2	2	5	7.2
記 憶 力	2	2	0	4	5.8
四肢不自由者のため	3	0	0	3	4.3
形 態 の 観 念	0	1	2	3	4.3
所 作 の 敏 活	2	0	0	2	2.9
秩 序 ・ 規 律	1	1	0	2	2.9
(註) その他、静止、命令服従、方位、手工を目的としたものが各1教材ずつ配当されていた。					

した背景には、それらは精神薄弱児にとって親しみ易く、且つ具体性がある、生活習慣を養成する上で重視されていたという教育事情もあったと考えられる。

この教育における先覚者としての石井は、多くの教育者、特に施設創設者たちに教育面で少なからず影響を与え、精神薄弱児教育の発展に貢献したのであるが、このことに関して体育的側面から若干検討を加えてみたい。

石井は「日頃自己を宣伝しないといふよりも、寧ろ自己をかくすといふことに於て定評」⁽⁴⁹⁾があり、滝乃川学園における教育法を積極的に学園外の人たちに鼓吹しなかったと言われる。しかし、この道を志す人たちは必ず同学園を参観しており、特に彼以後の精神薄弱児施設創設者の多くはその施設経営に当たり多大の影響を受けていた。その内、脇田良吉⁽⁵⁰⁾（1875～1948、白川学園⁽⁵¹⁾）、岩崎佐一⁽⁵²⁾（1876～1962、桃花塾⁽⁵³⁾）、林蘇東（1896～1956、カルナ学園⁽⁵⁴⁾）、川田貞治郎（1879～1959、藤倉学園⁽⁵⁵⁾）らが、石井の感化を少なからず受けた人たちである。石井が彼らに対し、どのような影響を与えたかについての全容は明らかでないが、彼らに共通して言えることは、石井の体育論に見られたように、運動を教育上重視していたことである。

脇田は運動を石井と同じく養護的領域でとらえており、散歩、体操（手足の簡単な運動）、遊戯（ブランコなど＜自由遊戯＞、豆袋投げ、輪投げ、お小梅や球の投げ合い＜以上、教科として＞、弾豆＜指先練習＞）などの運動を指導⁽⁵⁶⁾、その他、「自彊術」も取り入れていた。岩崎は全教科を「普通」教科、「治療」教科及び「特殊」教科に分けて指導、特に体操を「治療」教科に含ませ、「全身の体操 部分的体操 整形体操」を実施した。⁽⁵⁷⁾「意志を強固にするには筋肉の運動鍛錬を施すことに依って或程度まで助長することが出来る」と考えた林は、体操、遊戯、身体教練・スポーツの他に、心練（治療体操）を日課に取り入れていた。林は藤倉学園で実際指導に当たったことがあり、彼が使用した心練という呼称は藤倉学園のそれを模ほうしたものである。川田は、精神薄弱児教育の治療として「高次機能の訓練を予想し、それに志向する」「低次機能の訓練」の必要性を指摘、「主として末梢機能の開発を直接に取扱う基本的訓練」を

総称して「心練」と呼称した。⁽⁵⁸⁾ 藤倉学園では、「心練体操」と「人としての動作練習」という運動学習の時間が設定されていた。⁽⁵⁹⁾ このように、いずれの指導者も運動を矯正・治療に活用したのであるが、その根底には、先述の石井の強調する「筋肉の統御」という理念が存在していたように思われる。例えば、石井の「筋肉の統御」や「動作の敏活」を目的とした運動教材と川田の「基本動作心練」を比較検討したとき、その目的や方法において共通点を指摘することができる。それらの一部を例示すると、次のようである。

＜石井の筋肉の統御を目的とした運動＞⁽⁶⁰⁾ 三尺の間隔をなして児童を一斉に起立せしめよ。而して教師は前面に立ちて「腕を真直に延し手の平を下に向けよ」「踵をあげて爪立ちせよ」「静に踵をおろせ」と号令して六回練習を繰返したる後「腕を下げて休め」と命ずべし。

＜動作の敏活を目的とした運動＞ 椅子を半円形に並べ児童等をして両足を揃へ両腕を組み、姿勢を正しくしてこれに着かしめ……極めて明確に「起立」と命じて一斉に起立せしめ、次に「坐せよ」と命じて一斉に坐せしむべし。此練習は三四回繰返すを要す。其間厳に沈黙せしむべし。

＜川田の基本動作心練＞⁽⁶¹⁾ (1)スー、又はス 正座。視線は前方に向き、上体はまっすぐ、両手はももの上に置き、坐る時には手を床の上につかないようにする。(2)ター、又はタ 立つ。上体はまっすぐ、「気をつけ」の姿勢。視線は前方に向く。(3)ネー、又はネ おお向けに寝る。視線は天井に向け、両手足、体共にまっすぐ。(4)オキー、又はオキ 上体を起す。ネからの状態から上半身を起すのであるが、その時に床上には手をつかない。両手はももの上におく。(5)ソノママネー、又はソノママネ オキの動作から、ネの動作にうつる。(動作の略図及び<21>までの運動を省略する。)

川田の基本動作心練は、運動量(多)、運動の種類(多)、リズムの有無(有)、号令の口調(簡略・短)において、石井の運動内容と異なるものをもっていった。しかし、筋肉活動により精神(川田は高次機能)を啓発しようとしたこと、命令により習慣化を図ろうとしたこと、静かな場所でのグルーピング・反復練習を重視したことなど、両者にはその目的や方法に多くの共通点が見られた。川田は先輩の石井と深い関係を持ち、しかも石井と同じく E. O. Seguin の^{(62), (63)} 生理学的教育法に強く影響を受けていたことから、両者に共通性が見られることは当然の帰結であったかも知れない。その意味で、それらの共通点は単なる類似にしか過ぎない場合も考えられ、直ちに影響があったとは断定できない。従って、本稿では両者の共通性を指摘するととどめ、その影響については今後の課題としておきたい。

2) 運動指導法

石井は、「白痴児其研究及教育」⁽⁶⁴⁾、「治療教育技術」⁽⁶⁵⁾及び「白痴教育」⁽⁶⁶⁾の中で運動に関連する指導法について言及している。例えば、「治療教育技術」の「遊戯競技」には、次のような運動指導に関する留意事項が列举されている。

- 一. 凡て競技の際には児童等に「我等は遊戯をなしつゝあり」といふが如き気分を有せしむる事必要なり。……
- 二. 練習は成るべく簡単なるをよしとす。……
- 三. 一度に一事を限りて習得せしむるやう注意すべし。
- 四. ……指導者たるものは常に忍耐つよくしてしかも快活又楽天的ならざるべからず。……教師は前以て能く練習の方法などを熟知し置くこと大切なり。
- 五. 練習の方法は常に一定して置くべし。……
- 六. 号令は極めて単純なるを要す。……
- 七. 競争的遊戯は児童等が十分に其方法を会得するに至るまで必ず一列としてなさしむべし。

- 八. 精神薄弱児は正常児の如く自由の遊戯をなすこと能はざるを以て必ず適当なる指導者、監督者なかるべからず。……
- 九. 凡ての練習は出来得る限り面白くすべし。……
- 十. 一集合の時間は一時間を超ゆるべからず。……一集中一遊戯の時間は四分乃至十分を適度とす。……
- 十一. 活動少き二種の遊戯を連続的になさしむべからず。
- 十二. 唱歌には簡単なる動作を伴はしむるをよしとす。
- 十三. 若床の上に線などを画く必要あるときはチョークに少しく水を湿したるを用ふべし。

以上を項目別に内容を検討してみると、一は遊戯本能の喚起化、二・三・五・七・十一は学習内容の軽減化、四は指導者の感化、六は指導の簡明化、八は学習の安全化、九は学習内容の興味化、十・十二は学習の効率化・動作化、十三は運動の誘発化をねらったものと言えよう。

なお、「白痴児其研究及教育」では、次のような「教授上注意すべき二三の要件」が挙げられている。

- 第一 空腹のまゝにて児童を教場に入らしむべからず。
- 第二 義務として日々の学課に就かしむることなく、快樂としてこれをなすに至らしめざるべからず。
必ず運動、遊戯、音楽等を以て、これを始めこれを終るべし。
- (第三、第四を省略)
- 第五 児童にして、聊かにても疲労を感じたる時は、直に授業を中止すべし。
- 第六 第一の務は、児童の不随意運動を矯正するにあり。
- (第七を省略)
- 第八 反覆せしめよ。
- 第九 戸外に於てなし得べきことをば、決して室内に於てなさしむべからず。
- 第十 常に心を快活ならしむる様務むべし。
- 第十一 自然の発達停止せるところより始むべし。故に各人各個の出発点あり。……
- 第十二 新旧知識の連絡をなさしむべし。
- 第十三 健態に於る精神発達の順序をば、児童につき又書籍につきて怠らず視察し、以て彼我発達の状態を対照比較すべし。

第一・第二・第五・第十は心理的あるいは生理的本能を重視した指導の必要性を、また、第六は治療教育的矯正、第八は学習の反復化、第十一は指導の個別化をそれぞれ指摘したものである。なお、第十三の内容は、健常児の一般的発達過程を知ることにより精神薄弱児の発達程度を明らかにするとともに、それを指導上に活用させていく必要性を強調したものである。その他、石井は、運動の順序及び早期訓練などについても指摘している。「眠レル精神ヲ覚醒シ、鼓舞スル」ためには、「秩序的ニ覚官ヲ練習シ」ていくことが肝要であった。彼は「軀幹・大関節・頸・大腿部・肩・膝・肘等ノ基礎的筋肉ノ練習ヨリ始メテ順次手舌顔発音機関等複雑ニシテ補助的筋肉ノ活動ニ及ボスベキデアル」⁽⁶⁷⁾と、また、それは「始めは教師のなすがまゝに摸倣せしめ、遂に自己の意志の命令により自由に行動し得るに至らしむる」⁽⁶⁸⁾べきだと強調している。その開始時期については、「早きに失するの憂決してあることなし」⁽⁶⁹⁾と、訓練の早期化を提唱している。こうした精神薄弱児に対する運動指導上の考え方は、現在も基本とされているものである。

以上、石井の精神薄弱児に対する運動指導法を概観したのであるが、彼の指導法は幅広い「学理の研究と、⁽⁷⁰⁾実地の経験」から生まれたもので、それは今日の内容を少なからずもってい

た。特に、指導面（狭義の）における簡明化・個別化・早期化，あるいは学習（指導）面における安全化・興味化・動作化・反復化などを重視したその指導法は，現今の指導法にも多くの示唆を与えていると言えよう。

お わ り に

石井の精神薄弱児体育論の概観を通じ，若干の知見が得られたので，それらをまとめてこの小論の結語としたい。

1. 石井の体育論は心身相関論的立場に立って発展させたものであり，人格陶冶を志向した近代的理念をもっていた。また，その形成に当たり，ヘルバルト派の影響が見られた。

2. 精神薄弱児の体育は心身の調和的発達を目的に実践され，幅広い内容を包含していた。また，これら児童の運動は，衛生，矯正及び筋肉の統御を目標として実践された。強いて言えば，その中核は筋肉の統御にあった。なお，この運動理念は，その後も精神薄弱児体育に継承されていった。

3. 教材は3段階方式で設定され，教育的な配慮がなされていた。

4. 指導法には，今日的意義をもつものが少なくなく，現今の精神薄弱児体育へ示唆を与える内容が見られた。

註 並 び に 引 用 文 献

- (1) 一宮俊一（1972），「石井亮一の子精神薄弱児観」，徳島大学学芸紀要，教育科学，第21巻，p. 1.
- (2) 教育人名辞典刊行会（編）（1957），教育人名辞典，理想社，p. 39.
- (3) 脇田良吉（1933），異常児教育三十年，日乃丸会，p. 7.
- (4) 石井亮一（1940），「教育学講義」，石井亮一全集，第3巻，石井亮一全集刊行会，pp. 14-33.
- (5) 石井亮一（1904），白痴児其研究及教育，丸善株式会社，pp. 251-262.
- (6) 石井亮一（1940），「治療教育技術」，石井亮一全集，第1巻，石井亮一全集刊行会，pp. 204-234.
- (7) 石井亮一（1940），「教育学講義」，前掲書，p. 317.
- (8) 日本近代教育史事典編集委員会（編）（1971），日本近代教育史事典，平凡社，p. 595.
- (9) 日本近代教育史事典編集委員会（編）（1971），前掲書，p. 595.
- (10) 尾形裕康（1980），日本教育通史研究，早稲田大学出版部，p. 242.
- (11) 日本近代教育史事典編集委員会（編）（1971），前掲書，p. 595.
- (12) 石井亮一（1940），「教育学講義」，前掲書，p. 3., 7. リンドネルの教育の要約となるべき四箇の条件とは，「(一)教育には教育者あらんを要す。……(二)教育には教育を受くる人あらんを要す，……(三)教育には定案の感化あらんを要す。四教育には一定の目的あらんを要す。」というものであった。
- (13) 石井亮一（1940），「教育学講義」，前掲書，p. 14.
- (14) 石井亮一（1940），「教育学講義」，前掲書，p. 14.
- (15) 石井亮一（1940），「教育学講義」，前掲書，pp. 1-33.
- (16) 石井亮一（1940），「教育学講義」，前掲書，pp. 14-15.
- (17) 石井亮一（1940），「教育学講義」，前掲書，pp. 15-33.
- (18) 石井亮一（1940），「教育学講義」，前掲書，pp. 22-23.
- (19) 毛利偲太郎・神保涛次郎（1889），体育学，博聞本社，pp. 148-156. 同書は，「規定運動」（体操），「自由運動」（散歩，遊戯），「技術運動」（剣術，柔術，馬術，漕舟，水泳）の三領域を挙げている。なお，同書の「緒言」には「歐洲諸大家ノ説ヲ参照シ此一小冊ヲ編纂セリ」と記されている。
- (20) 高島平三郎（1908），体育原理（四版），育英社，pp. 96-126. 同書は運動を「一，規則運動……（普

通体操・兵式体操等)二,自由運動……(遊戯・散歩・跳躍等)三,技術運動……(フットボール・ベースボール等)四,職業運動……(裁縫,手工,農業等)」と分類,「学校体育ニハ広ク一般体育ノ目的ヲ包含セシメ,決シテニ偏セシムベカラザルナリ」と,広い範囲で運動を求むべきことを主張している。

- (21) 毛利僊太郎・神保清次郎(1889),前掲書,pp.147-148.
- (22) 石井亮一(1940),「教育学講義」,前掲書,p.15.
- (23) 石井亮一(1940),「教育学講義」,前掲書,p.15.
- (24) 今村嘉雄(1970),日本体育史,不昧堂,pp.435-437.
- (25) 今村嘉雄(1970),前掲書,p.448.
- (26) 高島平三郎(1908),前掲書,p.3.(凡例)高島は「從來……運動ヲ以テ単ニ筋肉ノ発達ヲ目的トスルガ如クニ思惟セル……」と指摘している。
- (27) 石井亮一(1940),「教育学講義」,前掲書,pp.30-33.
- (28) 石井亮一(1904),前掲書,p.261.
- (29) E. O. Seguin, 薬師川虹一(訳)(1973),障害児の治療と教育,ミネルヴァ書房,pp.63-177. 石井の「筋肉の統御」に対比されるものとして,Seguin は「筋肉の知性化」(同書,p.81)という表現を用いている。
- (30) 石井亮一(1904),前掲書,pp.125-127.,131-132.,168-169.,251-261.
- (31) 乙竹岩造(1908),低能児教育法,目黒書店,pp.463-473.
- (32) 脇田良吉(1915),異常児教育の実際,金港堂,p.191.
- (33) 川田貞治郎(1936),「運動治療の実験的研究」,第7回体育研究会々誌,p.8.
- (34) 荒木善次(1935),低能児教育の実際,文川堂書方,p.112. 同書には,なお,荒木は神保三郎の影響を強く受けと記されている(同書,p.60.).
- (35) 木庭修一・斉藤義夫・植野善太郎(1974),精神薄弱児の体育指導,金子書房,pp.10-21.
- (36) 高島平三郎(1910),「人物養成上より見たる体育」,黒沢勇(編),現代之諸名家体育論,日本体育会,p.300.
- (37) 小林佐源治(1914),劣等児教育の実際,目黒書店,pp.210-214.,347-350.,450-455.,500-508.
- (38) 田島真治(1914),「劣等児の体操」,教育研究,第127号,pp.48-53. 田島真治(1914),「劣等児の体操」,前掲書,第128号,pp.38-43.
- (39) 留岡清男(1937),「石井亮一先生と其の事業」,教育,第5巻第2号,p.300.
- (40) 留岡清男(1937),前掲論文,p.301.
- (41) 池田隆(1911),「東京府下及埼玉県下に於る異常児童収容所視察報告書」,神経学雑誌,第10巻第10号,pp.12-13. 同報告によれば,同年の児童数は55名であった。
- (42) 東京府社会事業協会(編)(1923),東京府社会事業概観,第3輯,pp.265-293. 同書によれば,大正9(1920)年現在で児童数は34名であった。
- (43) 浜田陽太郎・石川松太郎・寺崎昌男(編著)(1978),近代日本教育の記録,上,日本放送出版協会,pp.243-245. 同書によれば,児童数は昭和10(1935)年55名,同15(1940)年78名であった。
- (44) 教育人名辞典刊行会(編)(1957),前掲書,p.40.
- (45) 教育人名辞典刊行会(編)(1957),前掲書,p.40. 教育の柱として,宗教教育も挙げられる。
- (46) 石井亮一(1940),「治療教育技術」,前掲書,pp.204-234.
- (47) 石井亮一(1940),「教育学講義」,前掲書,pp.204-234. 石井は「遊戯競技」教材を三部に分類した理由について明らかにしていない。
- (48) 石井亮一(1940),「教育学講義」,前掲書,p.33. 石井亮一(1940),「精神薄弱児に就て」,前掲書(第3巻),p.177. 石井は「教育学講義」で欧米における「リング式の体操」が障害児学校に導入され,効果を挙げつつあることを述べている。また,「精神薄弱児に就て」では,矯正のための体操を奨励すべきことも強調している。

- (49) 留岡清男 (1937), 「石井亮一先生と其の事業」, 前掲書, pp. 297-298.
- (50) 脇田良吉 (1933), 前掲書, p. 7., 15. 脇田は滝乃川学園を参観し, その実践を研究している。
- (51) 精神薄弱問題史研究会 (編) (1980), 人物でつづる精神薄弱教育史, 日本文化科学社, p. 161. 妹尾正は, 岩崎が石井から指導を受けたと指摘している。
- (52) 岩野喜久代 (1936), 「カルナ学園を見る」, 児童研究, 第6巻第5号, p. 53. 岩野は, 林が石井に師事したと報告している。
- (53) 精神薄弱問題史研究会 (編) (1980), 前掲書, p. 158. 石井は, 藤倉学園創設の労をとっている。
- (54) 脇田良吉 (1915), 前掲書, pp. 240-245.
- (55) 脇田良吉 (1933), 前掲書, p. 147.
- (56) 岩崎佐一 (1941), 「精神薄弱児童の救護徹底策」, 精神衛生, 第9号, p. 13.
- (57) 岩野喜久代 (1936), 前掲論文, pp. 54-55. 障害児は「自分の力で筋肉運動をすることが出来ないから」, 「治療体操器」という「器械の力を借りて身体方面の筋肉を働かせるやうに」したと言われる。
- (58) 川田貞治郎 (1958), 「精神薄弱児の教育的治療法に関する一試論——心練を中心として——」, 精神神経学雑誌, 第60巻第5号, p. 20. なお, 彼は, この「両訓練の関係は部分的運動機能を各個に訓練しつつ、全体的運動機能の改良増進を予想する」体操に似ていると述べている。
- (59) 藤倉学園 (1921), 大正九年度年報, 第1巻, p. 20.
- (60) 石井亮一 (1940), 「治療教育技術」, 前掲書, p. 210., 213.
- (61) 永塚けさ江 (1968), 「川田貞治郎における心練——基本動作訓練, 直観教育を通して——」, 東京学芸大学臨時養護学校教育養成課程卒業論文, pp. 12-18.
- (62) 川田貞治郎 (1958), 前掲論文, p. 20.
- (63) 西谷三四郎 (監) (1978), 精神薄弱教育の基礎理論と実践, 日本図書文化協会, pp. 90-106. 清水寛の「川田貞治郎の『教育的治療』の思想——序説——」を参照した。
- (64) 石井亮一 (1904), 前掲書, pp. 143-144., 252-253.
- (65) 石井亮一 (1940), 「治療教育技術」, 前掲書, pp. 204-206.
- (66) 石井亮一 (1918), 「白痴教育 (中)」, 神経学雑誌, 第17巻第9号, p. 20.
- (67) 石井亮一 (1918), 前掲論文, p. 20.
- (68) 石井亮一 (1904), 前掲書, pp. 252-253.
- (69) 石井亮一 (1904), 前掲書, p. 253.
- (70) 石井亮一 (1904), 前掲書, p. 3. (序)

参 考 文 献

以上の他に, 次のような文献を参考資料とした。

- ・菊池義昭 (1979), 「滝乃川学園の創立前後の歴史的研究——『女学雑誌』の資料を中心として——」, 精神薄弱者施設史研究, 創刊号, pp. 25-87.
- ・峰島厚 (1979), 「戦前の精神薄弱者施設『滝乃川学園』史研究」, 精神薄弱者施設史研究, 創刊号, pp. 88-106.
- ・石井亮一 (1903), 「白痴教育一斑」, 神経学雑誌第二巻第一号附録神経学年報, pp. 58-59.
- ・石井亮一 (1935), 「精神薄弱児の幼児における状態について」, 愛育, 第1巻第5号, pp. 18-20.
- ・滝の川学園 (1910), 学園のまとる, 滝の川学園, p. 24.
- ・一番ヶ瀬康子 (1964), 「石井亮一伝」, 精神薄弱問題史研究紀要, 第1号, pp. 15-28.
- ・一宮俊一 (1971), 「わが国における初期の精神薄弱教育の性格」, 徳島大学学芸紀要, 教育科学, 第19巻, pp. 1-9.
- ・津曲裕次 (1980), 精神薄弱問題史概説, 川島書店, pp. 39-142.